

ldog-chos について

小 野 田 俊 蔵

前稿¹⁾では、アポーハ論を背景に持ったチベット僧院学習内での「概念(像)」の問題を扱った。すなわち、例えば “bum-pa'i ldog-pa” という様に “ldog-pa” なる術語を使つて「～という概念」「概念としての～」という意味を表わす用法が認められるのである。さて、その様にして取り出された諸概念はそれら自体さらに吟味を加えられ、質料を持った物質を対象とする “rdzas-chos (具象概念)” と、質料を持たないものを対象とする “ldog-chos (抽象概念)” とに分類される。本稿はその “rdzas-chos” と “ldog-chos”²⁾についての覚え書きである。

本稿で考察されるものは、一般にチャパ流 (phywa-pa'i lugs)³⁾とよばれ、12世紀中頃に活躍した学僧チャパ・チョェキセンゲ (phywa-pa chos-kyi señ-ge)⁴⁾によつて創始されたものと伝えられている。チベット僧院内で基礎教育の教科書として使われるドゥラ (bsdus-grwa) 書類のほとんどすべてがこのチャパ流を継承しているが、しかしこれが “rdzas-ldog” の規定の唯一のものではなかつたようである。例えば、後述するようにツォンカパがその師レンダーワ (red-mda'ba) から伝えられた説明は後世のこれらドゥラ書が伝えるものとは少々趣を異にしている。また、『ラトドゥラ』(rwa-stod bsdus-grwa)⁵⁾が伝えるある意見によれば、“rdzas-ldog” に対するこの必要以上にカテゴリーカルなチャパ流の規定には正統的なインド撰述論書の裏付けがなく、単なることばあそびであつて仏教教義研究のためには有益とは言えない⁶⁾、とまでされる意見もあつたようである。ただしこのチャパ流の吟味方法を学習することはドゥラ書本来の目的である思考能力の養成という観点からはきわめて効果のあるもので、多くのドゥラ書がチャパ流の “rdzas-ldog-gi rnam-bzag” を採用することの理由もその点に存すると思われるのである。

本稿の表題とした “ldog-chos” とは、*R-DG* に援引されるケートupp (mkhas-grub) のことば⁷⁾をかりて簡略に言えば、“rtog-pas btags-pa tsam gyi chos (思考によつて構築されただけの存在)” であつて、後述するように、質料 (rdzas) を持たないものを対象とする「抽象概念」ということである。また、ツォンカパの伝えるレンダーワによる定義では、“rtog-pa la rdzas kyi yon-tan du snañ-ba'i chos

gañ-zig, dños-po ma yin-pa⁸⁾ (思考に於て質料〔を持つもの〕の特質としてあらわれる存在であり、しかも物でないもの)”とされる。ところが、チャパ流の“rdzas-ldog”の定義では全くこれら上記の考え方とは異つた観点から吟味を加えられているのである。チャパ作の『ドゥラ』に採録されていたと伝えられる⁹⁾『rdzas-chos ldog-chos の章』が未だ発見されていない現時点では、チャパ自身がどのような言葉を使つたかは正確には明らかではないが、後世のドゥラ書に伝えられるもの、あるいはツォンカパ等が断片的に伝えるものを総合してチャパ流の“rdzas-ldog”を以下に紹介してみたい。

まず、“rdzas-chos (具象概念)”は“khyod¹⁰⁾khyod-rañ yin, khyod ma yin-pa khyod ma yin¹¹⁾。(それがそれ自身である〔と言え〕、それでないものがそれでない〔と言える〕もの)”と定義される。“bum-pa (壺)”を例とすると、「壺は壺である」と言え、「壺でないものは壺でない」と言える。すなわち、肯定的にも否定的にも自己叙述的(述語可能, *prädikabel*)な概念と規定するのである。

それに対して“ldog-chos (抽象概念)”は“khyod khyod-rañ ma yin-pa’am, khyod ma yin de khyod yin-pa gañ-ruñ yin-pa¹²⁾。(それがそれ自身でないか、あるいは、それでないこと〔一もの〕がそれであるか、のどちらかのもの)”と定義される。

“ldog-chos (抽象概念)”はさらに、チャパ流の吟味の方法、すなわち「それがそれ自身であるかないか」と「それでないこと〔一もの〕がそれであるかないか」という方法によつて、二種、三種あるいは七種以上に分けられるようである。ここでは基本的な三種の分類を書き出してみよう。基本的な三種とは、『ヨンジンドゥラ (*yoñs-'dzin bsduś-grwa*)』¹³⁾等のドゥラ書では“ldog-chos dañ-po gsum”とよばれるもので、“rañ yin-pa’i ldog-chos ([肯定的には] 自己叙述的〔述語可能〕な抽象概念)”, “rañ ma yin-pa’i ldog-chos ([肯定的に] 非自己叙述的〔述語不可能, *imprädikabel*] な抽象概念)”, “ldog-chos phuñ-sum tsam-po-pa ([肯定的にも否定的にも非自己叙述的な] 絶対抽象概念)”の三種である。

まず、“rañ yin-pa’i ldog-chos ([肯定的には] 自己叙述的な抽象概念)”とは、“khyod khyod-rañ yin, khyod ma yin-pa khyod yin¹⁴⁾。(それがそれ自身であり、それでないこと〔一もの〕がそれであるもの)”と定義される。*Y-DG* での例“mtshon-bya (定義されるもの=被定義項)”のように、“mtshon-bya”自身も *mtshon-bya* であるけれども“mtshon-bya ma yin-pa”も *mtshon-bya* であると言えるのである。筆者の責任に於て他の理解しやすい例を出すと、「抽象的」なる概念はそれ自身が抽象的であるが、「抽象的でない」という概念も同じく抽象的である

と言える。すなわち「抽象的」なる抽象概念は、肯定的には自己叙述的であるが、否定的には非自己叙述的な概念ということが出来る。このような概念を“*rañ yin-pa'i ldog-chos*”と規定するのである。*Y-DG* では“*rtag-pa*”, “*spyi*” など¹⁵⁾もこの例とされる。

次に, “*rañ ma yin-pa'i ldog-chos* ([肯定的に] 非自己叙述的な抽象概念)”とは, “*khyod khyod-rañ ma yin, khyod ma yin-pa khyod ma yin*¹⁶⁾。(それがそれ自身でなく、それでないこと [一もの] がそれでないもの)”と定義される。例えば, “*mtshan-ñid* (定義 [項])”なる概念は、定義される対象(被定義項)ではあつても定義 [項] ではなく、「定義でないもの」なる概念も同様に定義 [項] ではない。前述の「抽象的」に対して、ここでは「具体的」なる概念をこの例とすることが出来るだろう。「具体的」なる概念は、それ自身具体的ではなく、「具体的でない」という概念も同じく具体的ではない。*Y-DG* では“*tha-dad*”, “*bum-pa dan gci*”, “*ka-bum gñis*”などがこの例とされる¹⁷⁾。

次に, “*ldog-chos phuñ-sum tsam-po-pa* (絶対抽象概念)”とは, “*khyod khyod-rañ ma yin, khyod ma yin-pa khyod yin*¹⁸⁾。(それがそれ自身でなく、それでないこと [一もの] がそれであるもの)”と定義される。すなわち、肯定的にも否定的にも述語不可能な概念のことで、例えば, “*bum-pa'i spyi* (壺の [上位の] 類)”なる概念などがこの定義を満たす¹⁹⁾とされる。他に *Y-DG* では“*dños-po'i spyi'i bye-brag*”, “*dños-po'i spyi*”等²⁰⁾が例とされる。

以上紹介した三種の“*ldog-chos*”のうち、最後の“*ldog-chos phuñ-sum tsam-po-pa*”は後世になつて付加されたものらしく、僧院内の問答を想定して創り出されたきわめて技巧的なものと言えよう。こうして創り出された“概念”の概念も、さらに“*rjes-mthun*”や“*mu*”などとよばれるより複雑なものに分類されていくのであるが、それらについてはさらに考察を加えたい。

1) 印度学仏教学研究, 第28巻第2号の拙論『「*ldog-pa*」について』。

2) 一般に両者は合せて“*rdzas-ldog*”と略称される。以下略称による。

3) Geshé Ngawang Nyima; *bsdus-grwa brjed-itho* (Memoranda on Logic), Univ. of Leiden, 1970. (以下 *N-DG* と略) p. 20 etc.

4) 1109~1169年の人。Phya-pa, Cha-pa と綴られる場合もある。

5) mChog lha 'od zer; *tshad-ma rnam-'grel gyi bsdus gzuñ šes-bya'i sgo 'yed rgol nan glañ-po 'joms-pa gdon lha'i gad rgyaṅs rgyu rig lde-mig*. (Tohoku No. 6858) 最近インドから再刊された。*Rwa stod bsdus grwa*, Dharamsala, 1980. (以下 *R-DG* と略)

- 6) *R-DG* p. 68 より取意。
- 7) *R-DG* p. 67. mKhas-grub dge-legs dpal bzañ-po; *tshad-ma sde-bdun gyi rgyan yid kyi mun sel.* (Tohoku No. 5501) よりの引用とされるが、筆者未見。
- 8) Tsoñ-kha-pa blo-bzañ grags pa'i dpal; *sde-bdun la 'jug-pa'i sgo don gñer yid kyi mun sel.* (Tohoku No. 5416) インドから洋装テキストが出版されている。同題, Varanasi, 1972. (以下 *Ts-YM* と略し Varanasi 本の頁数を記す) p. 40.
- 9) Kloñ-rdol bla-ma ñag-dbañ blo-bzañ; *tshad-ma rnam-'grel sogs gtan tshigs rig-pa las byuñ-ba'i min gi grañs.* (Tohoku No. 6545), 2b2. (Śatapiṭaka vol. 100, p. 663)
- 10) “khyod” の用法については拙稿『問答 (rtsod-pa) における “khyod” の機能について』日本西藏学会々報, 第 25 号を参照されたい。
- 11) *Ts-YM* p. 41.
- 12) *Ts-YM* p. 41.
- 13) Yoñs-'dzin rdo-rje 'chañ; *tshad-ma'i gzuñ don 'byed-pa'i bsdu-s-grwa'i rnam-b'zag rigs-lam 'phrul gyi lde-mig.* (Tohoku No. 6857) (以下 *Y-DG* と略)
- 14) *Y-DG* Se-ra 寺版, Tashijon 版ともに 22b2, *Y-DG* 本文では派生する問答を予想した上でより煩雑な定義を示すが、本稿ではその中核のみを記す。以下註(16)(18)も同様。
- 15) *Y-DG* S 版 T 版ともに 23b5.
- 16) *Y-DG* S 版 23b5, T 版 23b6.
- 17) *Y-DG* S 版 23b5, T 版 23b6.
- 18) *Y-DG* S 版 T 版ともに 22b6.
- 19) *N-DG* p. 20, 一般に, A が B の〔上位の〕類 (spyi) であるということは, B が A の〔下位の〕種 (bye-brag) であるということと等価である。従つて「壺の類」がそれ自身すなわち壺の類であるかどうかは, 壺が「壺の類」の種であるかどうかを吟味すればよいことになる。一般に, B が A の種であるためには, (1) B が A であると言えること, (2) B が A と同質の存在であること, (3) B 以外に A であるものが存在すること, の三条件が必要とされる。例えば, 「桜」が「木」の種であるためには, (1) 桜が木であると言えること, (2) 桜と木が同質の存在であること, (3) 桜以外に木であるものが存在すること, が必要である。さて, 壺が「壺の類」の種であるためには, (1) の条件に照らして壺は「壺の類」でなければならないが, そうではない。なぜなら, 壺が「壺の類」であるということは壺が壺の種であることと等価であり, そのためには(3)の条件に照らして, 壺以外に壺であるものが存在せねばならなくなるのである。と説明される。
- 20) *Y-DG* S 版 T 版ともに 23b6.

(仏教大学助手)